

クルドの農業と農民 <最終回>

今後のクルド地域の安定と農業振興

このシリーズを通して、イラク・クルドの自然環境、そしてそこで行われている農業の状況、さらには農業に従事するクルド農民の気質などを紹介してきた。

現在、イラク・クルド地域はイラク国内で大きな自治を与えられ独自の発展を模索してきているが、農業はその大きな柱になっている。一方、多くのクルド人は戦火を逃れ、国外へ流出しており、特にテククラートの流出はクルド地域の農業発展に大きな障害となっているように感じているのは私だけではないであろう。これまで、湾岸地域を中心に見知ってきたクルド人の多くは外国人技術者として当該地域の発展に寄与してきている。一方で、クルド地域内部では、技術者不足のためにクルド人（自国民）による地域発展が阻害されるというジレンマがあるように感じた。

このシリーズで述べてきたように、クルド地域の農業開発のポテンシャルは高いものの、このような技術者不足がその発展の大きな制約要因になっている。クルド自治政府も農業試験場での研究や普及活動を通して農業の生産性や品質向上に努力はしてきているが、十分にその成果が現れている状況にない。この要因として、生産・流通・加工・販売と言った一連の部門における農民との連携や支援が不十分であることが課題と考えられる。特に野菜や果樹生産物の多くが、近隣地域の品質に負けていること、またこれら生産物の販路や必要な施設が十分に確保されていなかったり、流通手段が貧弱なため消費地に着くまでに生産物の品質低下を招いたりなどの課題を持っている。また、今後予想されるグリーンハウス内での野菜の連作栽培における病害

虫の対策も大きな課題となってくるであろう。

現在、クルド支援として JICA は「クルド地域園芸技術改善・普及プロジェクト」を実施しており、専門家派遣や研修が行われている。弊社職員が関係した調査に協力してくれた技術者も現地でプロジェクト実施の活動を行っている。人材育成をめざすこのような支援は有能な技術者育成のために有効であり、また親日的なクルド人に対して日本が協力を行うことは効果が大きいので、イラクへの農業振興のための支援として、今後も継続していく意義は大きいと考えられる。

過去のクルド人迫害やクルド人内部の対立も完全に解消されたとは言い切れない。現在も、旧勢力の影響力の度合いにより自治の状況も複雑だ。Erbil と Dohuk では旧 KDP（クルド民主党）が、また Suleimania では KPP（クルド労働党）の影響力が強い（2010 年当時）。このような不安定要素を早く解消し、クルド地域が早く安定し、住みよい地域として、またイラクの穀倉地帯としての地位を向上させ、イラク国内のクルド地域として発展していくことを強く望みたい。

このように言うのは簡単であることを重々わかっているつもりである。しかし、我々にとって未だに遠い「国」であるクルド地域ではあるが、このような地域での支援活動の一部に参加できたことに非常な満足感を持っている。クルドと日本、さらにはイラクと日本の友好関係が今後とも密になっていくことを望む。また、日本－イラクの友好を親密化する上で、農業支援は専門家－カウンターパート－農家が大地の上で日常的に顔と顔を合わせながらの協働作業であることから、人と人の信頼関係を築いていける国際貢献策の一つであることに間違いのないことを確信している。



たわわになる杏の実



クルドの友人たち